

## ヤツボシシロカミキリ, その後 (2)

小西 和夫<sup>1)</sup>

### はじめに—分布と食樹について—

前回の報文以降にヤツボシシロカミキリの産地として報告されたのが、鳥取市の本陣山 (山岸, 2020)。

山岸瑞樹氏が標高 180 m 付近のナナカマドで、成虫 4exs. を採集。特定の樹以外からは得られていないという。

さらに 90 年代に但馬のカミキリムシを精力的に調査されていた永幡嘉之氏から、浜坂町久斗山本谷で 2001 年にウラジロノキから羽脱した事例をご教示いただいた。また 1970 年代から兵庫県全域を独自に調査されていた阿部利一氏が、永幡氏よりも早く城崎町来日岳および浜坂町久斗山本谷でアズキナシから本種を羽脱させておられ、これらはいずれも現在に至るまで未発表であるとのことである。

アズキナシ *Sorbus alnifolia* は海外からの報告もあり注目していたが、日本でも食樹としていたようだ。ウラジロノキ *Sorbus japonica* もアズキナシによく似たナナカマド属 *Sorbus* の近縁種である。

初めての緊急事態宣言が解除された 2020 年 5 月末に久斗山から但馬海岸まで足を伸ばし、帰りに本陣山に寄った。北但馬から鳥取県東部の多雪地帯では特異的に低標高地にブナ林が散在し、ブナ帯要素のナナカマドやアズキナシも低位分布している。久斗山本谷は標高

3~400m にブナ林があり、麓の集落にはナナカマドの花が咲いていた。加美町の海岸近くにもナナカマドは自生しており、鳥取市の市街地に接する本陣山では 150 m 付近からナナカマドやアズキナシが見られた。

これまで東北日本において本種の産地は知られていなかったが、北海道においても記録された (北海道, 2016)。「北海道レッドリスト [昆虫>コウチュウ目編]」の 2019 年の改定に際し、「道内に生息記録のあるコウチュウ目の種・亜種について」作成された目録に記載された。分布概念図を大きく更新することになるが、朝鮮、中国東北部から極東ロシア、樺太に産する本種が北海道にいるのは不思議ではない。

ズミ (コリンゴ) の近縁種エゾノコリンゴ等を想像していたが、青塚昭仁氏からの私信によれば、北海道ではバラ科のクロミサンザシ *Crataegus chlorosarca* Maxim. の葉を後食するという。

クロミサンザシは北海道から樺太、極東ロシアと、長野の菅平に隔離分布している。寒冷な時期に北方より南下して分布を広げたのち、温暖化とともに後退して現在の分布になったと推定されている。

御岳周辺と広島では高原の湿地帯を好むズミに強く

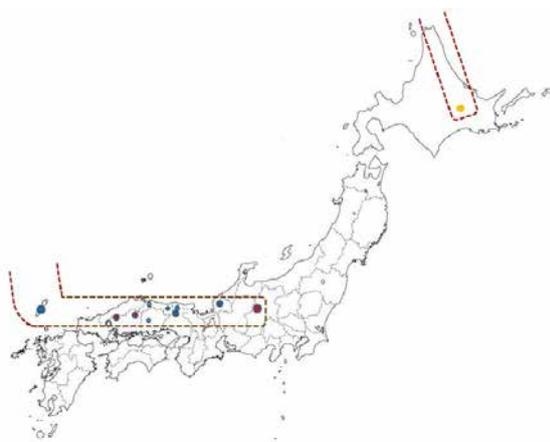


図1 分布概念図。



図2 ツシマナナカマド (但馬海岸)。「兵庫県植物目録」ではツシマナナカマドの項に [但馬] 扇ノ山, 氷ノ山, 妙見, 久斗, 床尾とある。

<sup>1)</sup> Kazuo KONISHI 兵庫県西宮市

依存. 福井, 但馬, 鳥取ではナナカマド属 *Sorbus* の仲間を利用しているが, 北海道ではクロミサンザシを後食. かつての特産地, 対馬の食樹は不明である.

### 兔和野にて

2020年は6月21日に兔和野を訪れたが, 2019年に初めて本種を得たナナカマドは伐採され, 数本の樹の枝が道端に棄てられていた.

幸い発生木は無事だったが, 葉を掬っても何も入らず, 近隣のナナカマドにも虫の気配がない. 伐採による乾燥化も懸念された.

一週間後の6月27日に再訪. 近辺が皆伐されると今後会えなくなる恐れもあり, 今回は少し採集して後食行為を観察することにする.

はじめに発生木を掬うと3頭が網に入った. この間の不安が一気に解消し, 安堵する.

触角に欠損があった1頭はリリースして, 2頭をケースに. 続いて近くのナナカマドを掬い, 初めての高木で2頭(ペア)を得る. 元の発生木でさらに2頭を追加, このうちの1頭と合わせて計5頭を持ち帰ることにした.

周辺の樹々も広く食樹として利用していると思われるが, 特定の貧相な樹の生葉に集まるのは不思議である.

隣の樹のゴトウヅルに花が咲いている. 本種と初めて出会った2018年は, 6月17日に満開だった. 2020年は例年に比べて雪が少なかったが, 春先の低温のせいか季節が1週間は遅いようだ.

発生木のナナカマドと帰途の道路脇にあったアズキナシの枝葉を, 数本手折って帰宅.



図3 ツシマナナカマドとアズキナシ(本陣山). 近年はアズキナシをアズキナシ属に含め, 学名を *Aria alnifolia* と表記することもある.



図4 伐採されたナナカマド(兔和野).



図5 ヤツボシシロカミキリ 2020.6.27(触角欠損).



図6 ヤツボシシロカミキリ 2020.6.27.



図7 ヤツボシシロカミキリ 2020.6.27.



図8 ナナカマド(初採集の高木).



図9 アズキナシの枝葉.

**観察記**

衣装ケース内のフローラルフォームにナナカマドとアズキナシの枝葉を挿し、持ち帰った5頭を放して後食の様子を観察した。

昼間は葉裏に静止して後食する個体が多く、ナナカマドの葉に不定形な穴をあけていた。飼育環境だからか、葉裏だけでなく表からも食べる。また食べながら葉上に黒く細い線状の糞を付けていく。「妖精」は、華奢な体でよく食べ、よく糞をする。

一枚の葉を激しく食害するものもいたが、野外では葉を移動しながら後食して穴状の食痕を残すのだろうと、この時は思っていた。アズキナシの葉にも穴状の食痕が見られる。

翌日、公園に植樹されていたヒメリンゴの葉を挿してみた。

3種の葉を同時に挿した時には寄り付かず、ヒメリンゴだけにすると食べるものもいる。

日が暮れると活発に飛びまわり、夜から朝にかけて



図10 衣装(飼育)ケース.



図11 後食の様子(ナナカマド).



図12 後食痕(ナナカマド).



図13 後食痕(ナナカマド葉の表).



図 14 後食痕 (アズキナシ).



図 15 後食痕 (ヒメリンゴ: ズミやエゾノコリンゴの近縁種).



図 16 交尾 2020.6.28 夜.



図 17 交尾 2020.6.28 夜.



図 18 交尾 2020.6.29 朝.



図 19 ヤツボシロカミキリの糞.



図 20 標本 [9 - 11mm] (八木剛氏 蔵・提供).

交尾行動がみられた。

この5頭は本誌に最初に投稿を勧めてもらった八木剛氏(人と自然の博物館)にお願いし、標本にしていた。兎和野産のヤツボシシロカミキリが地元の博物館に収蔵されるのは望外の幸せで、彼らも成仏できたらう。

### 対馬にて

県外への移動の自粛要請が解除された2020年6月19日から、急遽念願の対馬への渡航を計画。古くからヤツボシシロの特産地として知られ、シロカミキリ族のタカサゴシロ、オオシロ、ムネホシシロのほか、対馬特産種のチョウセンシロカミキリを産する対馬は魅力的だ。

しかし最近の対馬でのヤツボシシロの採集記録は確認できず、「長崎県産カミキリムシ科目録」(1994年)に対馬(比田勝、佐須奈、大星山、巖原)と、海岸近くの集落から山地まで採集地だけが記されている。今坂正一氏に尋ねたが採集状況は不明とのこと。

また「長崎県植物誌」(中西弘樹)にズミの記載はなく、「新対馬島誌」にはナナカマドやアズキナシは「低

地または低地に近いところから出現する」とある。比田勝や佐須奈など海岸近くでも記録があることから食樹は *Sorbus* の可能性が高いが、確証は得られていない。

7月2日から6日まで梅雨の最中ではあったが、晴れ間にも恵まれて様々な特産種に出会うことができ、夢のような日々を過ごした。朝鮮半島経由の大陸系のカミキリや、対馬暖流の影響で沖縄や南九州に見られる南方系のカミキリが混在する対馬は、やはり特別な島である。

林道を流して虫撮りに夢中になっていたのも、なじみ深いナナカマドは車中からも目に入ったが、アズキナシは見つからなかった。

残念ながらヤツボシシロには出会えなかったが、対馬にはノグルミとヤマグワが至る所に自生しており、生葉を掬うと前者からはタカサゴシロカミキリ *Olenecamptus formosanus* Pic, 1914, 後者からはキボシカミキリとともにチョウセンシロカミキリ *Olenecamptus subobliteratus* Pic, 1923 が網に落ちた。

帰宅予定の6日から九州地方を豪雨が襲い、対馬空港からは福岡行の最後の便だけが飛び、かろうじて西宮に帰着できた。



図21 ツシマナナカマド(対馬豊玉町).



図22 ツシマナナカマド(小葉・裏).

小葉は9-11枚が多く、葉裏に赤褐色の軟毛が密生するというサビバナナカマドの特徴は見られない。(各種文献にはツシマナナカマドとサビバナナカマドの2変種を記載).

「対馬の高等植物目録」1976年に「ズミ(有明山)」と記載されているが、学名は *Pilea hamaoi* Mak. とあり「ミズ」の誤植か。中西弘樹氏によれば1980年の外山三郎「長崎県植物誌」や最近の記録にもなく、対馬には見られないという。



図23 タカサゴシロカミキリ(対馬)2020.7.3.



図24 チョウセンシロカミキリ(対馬)2020.7.5.



図 25 ヤツボシシロカミキリ (大きな個体)13mm 2020.7.16.



図 27 ヤツボシシロ (図 25) とタカサゴシロ (図 26) の体サイズ比較 2020.7.16.



図 26 タカサゴシロカミキリ (小さな個体)13mm (村岡) 2020.7.16.  
タカサゴシロカミキリの上翅の斑紋には、白地に会合線や側縁、側紋部にわずかな茶色の線や点が登場する型 (図 23) と、茶色の線や側紋が発達して茶色地に 8 つの白色紋が現れる型 (図 28)、この 2 型の間で多様な変異がみられる。

### おわりに

兎和野には 7 月 16 日に再訪し、いつもの樹でまたヤツボシシロ 2 頭を得た。7 月中旬まで発生していることを確認した同じ日に、兎和野の北の村岡区にあるノグルミの生葉で近縁種のタカサゴシロカミキリ 2 頭を得た。両種は発生時期が重なり、ヤツボシシロの大きな個体とタカサゴシロの小さな個体は、ほぼ同じ体サイズであった。

「日本産カミキリムシ」によればタカサゴシロとは異所的に、ヤツボシシロがより高緯度の地域に分布するとあるが、兵庫から対馬に至るヤツボシシロの分布域では側所的もしくは同所的に生息しているようである。これらの地域では食樹の違いにより棲み分けているのだろうか。

ブログに掲載された奄美のタカサゴシロと北海道のヤツボシシロは、上翅の斑紋や後食痕、黒い糞を葉上に



図 28 タカサゴシロカミキリ生態写真 (奄美)「提供:『確認済飛行物体』(ブログ)」.



図 29 ヤツボシシロカミキリ生態写真 (北海道)「提供:『昆虫探偵団』(ブログ)」.

つけるところまでよく似ている。

ヤツボシシロが野外で後食している生態写真は初めて見る貴重な記録であり、飼育環境以外でも同じ葉を激しく食害することがわかる。

生態も形姿も似ている両種の祖先の起源や、いつ頃どこで種分化し、現在のような分布をするようになったのか興味は尽きない。

#### 謝辞

最後に、兵庫県のヤツボシシロカミキリに関する貴重な未発表記録について本誌で紹介させていただけることを、永幡嘉之氏並びに阿部利一氏に深く感謝し、敬意を表します。

またご多忙のなか美しい標本を作成していただいた八木剛氏にはこの場を借りて厚く御礼申し上げます。

さらに対馬の植物やカミキリについての照会に丁寧にお答えいただいた中西弘樹氏や今坂正一氏、境良朗氏、ブログ内の生態写真の提供を快諾していただいた nori さん、北海道の生態写真の提供及び食樹の情報をご教示いただいた青塚昭仁氏（だんちょうさん）に感謝いたします。

#### 参考文献

- 山岸瑞樹「鳥取市におけるヤツボシシロカミキリの記録」『すかしば』2020年(67)p62
- 清水寛厚・矢野孝雄「兵庫県北但馬地域における低位ブナ林とその存立条件」『鳥取大学教育地域科学部紀要 地域研究』2001年3(1)p111-131
- 紅谷進二「兵庫県植物目録」六月社書房 1971年
- 外山三郎, 松林文作「対馬の高等植物目録」『対馬の生物』(長崎県生物学会) 1976年
- 北海道(2016)【種・亜種目録】北海道のコウチュウ(2019年1月18日時点道調べ)  
[http://www.pref.hokkaido.lg.jp/ks/skn/syuasyumokuroku\\_konchu.kouchu.pdf](http://www.pref.hokkaido.lg.jp/ks/skn/syuasyumokuroku_konchu.kouchu.pdf) <2021年5月1日アクセス>
- 長崎昆虫同好会甲虫会グループ「長崎県産カミキリムシ科目録」1994年
- 『今坂正一と E-アシスト』(ブログ)  
<http://www.coleoptera.jp/modules/tinyd1/index.php?id=6> <2021年5月1日アクセス>
- 中西弘樹「長崎県植物誌」長崎新聞社 2015年
- 新対馬島誌編集委員会「新対馬島誌」1964年
- 大林延夫, 新里達也「日本産カミキリムシ」東海大学出版会 2007年
- 「奄美大島その4～タカサゴシロカミキリなど～」『確認済飛行物体』(ブログ)  
<http://ifo-nori.cocolog-nifty.com/blog/2018/05/post-b32c.html> <2021年5月1日アクセス>

「ヤツボシシロカミキリ」『こんちゅう探偵団』(ブログ)  
[https://blog.goo.ne.jp/necydalis\\_major/e/770afc4915f4a0bd974f1b50c7ec136e](https://blog.goo.ne.jp/necydalis_major/e/770afc4915f4a0bd974f1b50c7ec136e) <2021年5月1日アクセス>